7 月 10 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　13：　13－25

「神は約束に従って」

「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。」(コヘレトの言葉 3:11)

迫害者であったパウロがキリストを宣べ伝える者とされたのは、もちろん神の思いがあったからです。神は全てを見通し、それぞれにふさわしい役割を備えてくださるのです。

ペルシアの王クセルクセスの時代、大臣ハマンの策略によりユダヤ人が根絶されそうになったことがありました。その時、王妃となっていたエステル(ユダヤ人であることを隠していました)に、養父モルデカイは「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」(エステル記 4:14)とメッセージを送ります。

当時、王の呼び出し無しに王の前に出ることは、命の危険と隣り合わせでした。王の機嫌一つで処刑されることさえあったからです。それでも、神を信頼するエステルは命をかけて王に願い出ます。「ハマンと共に祝宴においでください」と(エステル記 5:4)。そして、そこでハマンの悪事が暴かれ、ユダヤ人は助かるのです(エステル記 7-8 章)。

一方、ヘロデの妻ヘロディアは洗礼者ヨハネを恨んでいました(マルコによる福音書 6:19)。自分たちの結婚が神の前に正しくないとされたからです(マルコによる福音書 6:18)。

ヘロデがヘロディアの娘に「何か願いはあるか」と問うと、ヘロディアは娘をして「洗礼者ヨハネの首を」と答えさせます(「……母親は、『洗礼者ヨハネの首を』と言った。早速、少女は大急ぎで王のところに行き、……」マルコによる福音書 6:24-25)。そして、その願いは聞き入れられ、洗礼者ヨハネは殺されてしまいました。

この二つの物語、前者は神の計画で、後者は違うと思うかもしれません。しかし、そうではないのです。なぜなら、「神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。」(コヘレトの言葉 3:11)から。人の目には良いと見えることも、悪いと見えることも、「主の企てはとこしえに立ち／御心の計らいは代々に続く。」(詩編 33:11)のです。

パウロはアンティオキアの人々を力づけるべく、イスラエルの歴史と共に歩まれる神の姿を語ります。イスラエルの歴史を通して、種々様々なことがありましたが、その全ては神の御手の内にあることを繰り返し説明します。何よりも、神が最初からの約束通りにイエスをキリストとして送ってくださったことを語り、一人ひとりが神の救いの計画の内にあることを思い起こさせるのです(「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。」使徒言行録 13:23)。

私たちの周囲にも「これが神の計画なのか」と思わされることはたくさんあります。その度に「なぜ神は」とつぶやきたくなります。神を恨みたくもなります。しかし、そのような私たちのために、神は約束通りにイエスをくださったのではなかったでしょうか。

神は初めから一貫して変わっておられません。造られた全てをご覧になって、「見よ、それは極めて良かった」(創世記 1:31)といわれたあの時から。ならば、その神に、神の計画に全幅の信頼を置いて、今、与えられている道を懸命に歩み通すのみです。それが私たちに示された神の思いなのですから。